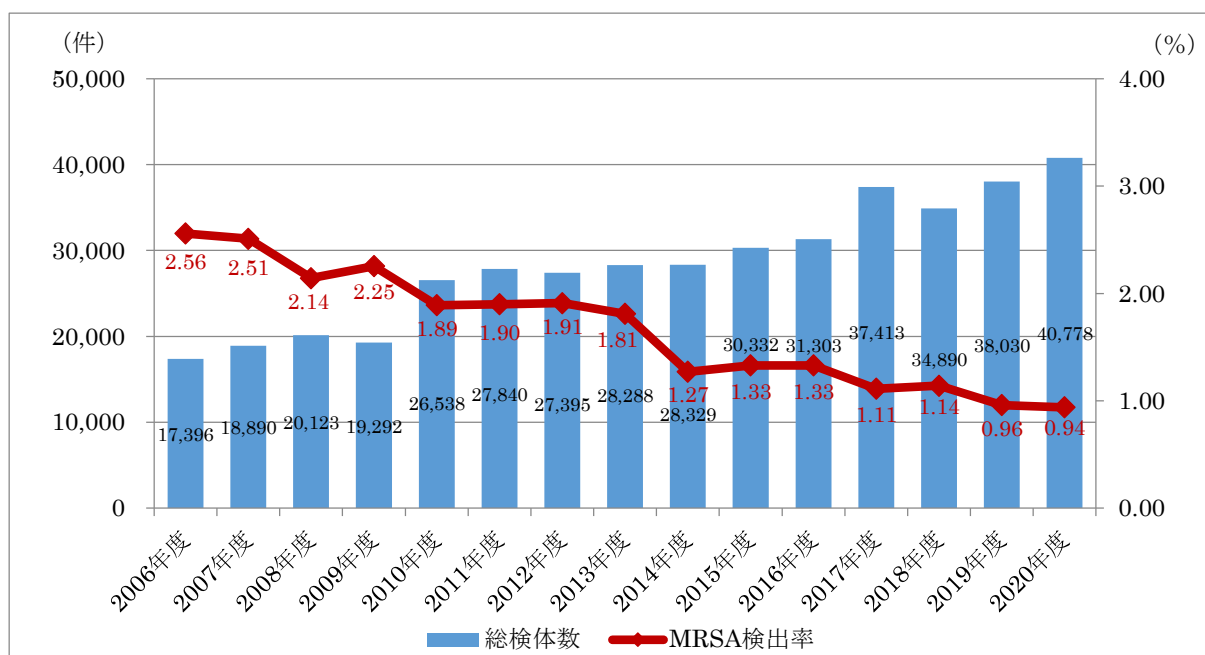


## 1 8 . MRSA 検出患者の割合



感染防止対策実務小委員会 (ICT) では、院内耐性菌検出状況の把握と抗菌薬適正使用の観点から細菌感染兆候のある症例には積極的に細菌培養検査を提出するよう指導している。更に、保菌状態であっても感染症発症のリスクが高い症例が入院する ICU、HCU、NICU では、入室時 MRSA スクリーニング検査を実施している。それに伴い、2010 年度以降、培養検体数は年々増加(2020 年度は 40,000 件/年超)傾向にある。一方、総検体数に占める MRSA の検出率は 2006 年度以降、減少傾向にあり、2019 年度より 1.0%を切った。この理由としては、MRSA の検出件数(分子)が減少したことと、総検査件数(分母)が増加したためと思われる。MRSA は日本の如何なる医療関連施設でも検出される耐性菌である。その為、MRSA の検出件数や検出率は、病院全体の感染対策が適切に機能しているかを示す指標と考えることができるかも知れない。ICT では今後も、MRSA を含む耐性菌スクリーニングを充実させ、検出率の変動を監視することで、アウトブレイクを迅速に察知し、感染症診断・治療と具体的な感染対策に関する介入を強化するよう努めている。

\* 総検体数は、各年度内に微生物検査室に提出された細菌培養検体数(スクリーニング検査も含む)の総数である。MRSA 検出患者数は、過去 3 ヶ月以内に MRSA の検出歴がなく、新たに MRSA が検出された患者(検体の重複は1とカウントし、持込・院内発生、感染症・保菌などは加味せず)数とする。MRSA 検出率は、(MRSA 検出患者数/総検体数)×100(%)で求めた。